

おとずれ

国木田独歩

青空文庫

上

五月二日付の一通、同十日付一通、同二十五日付の一通、以上三通にてわれすでに厭あき足りぬと思いたもうや。もはやかかる手紙願わくは送りましたまわざれとの御意ぎよい、確かに承りぬ。されど今は貴嬢きみがわれにかく願ねがいたもう時は過ぎ去りてわれ貴嬢きみに願ねがうの時間ときなりしをいかにせん。昨年こぞの春より今年ことしの春まで一ひと年とせと三みつ月つきの間、われは貴嬢きみが乞こわるるままにわが友宮本二郎ともみやほんにじろが上しるを誌しせし手紙十二通を送りたり、十二通に対する君が十五通の礼状を数えても一年と三月が間の貴嬢きみがよろこびのほどは知らる。今十二通

の裏にみなぎる春の樂しみを變えて三通を貫く苦き消息おとずれとなしたもうは貴嬢きみならずや。貴嬢きみがいかにかに深き事情わけありと弁解いいひらきたもうとも、かいなし、宮本二郎が沈みゆく今のありさまに何かの関かりあらん。かの三通はげに貴嬢きみが読むを好みたまわぬも理ことわりぞかし、これを認めしたたしわれ、心乱れて手もふるいければ。されどわれすにこの三通にて厭あき足りぬと思いたまわば誤りなり。今はわれ貴嬢きみに願うべき時となりぬ。貴嬢きみはわが願いを入れ、忍びて事の成り行きを見ざるべからず、しかも貴嬢きみ、事の落着は遠くもあるまじ、次を見候そうらえ。——手荒く窓を開きぬ。地平線上は灰色の雲重なりて夕闇ゆうやみをこめたり。そよ吹く風に霧雨きりあめ舞い込みてわが面おもてを払えば何となく秋の心地こころちせらる、ただ萌もえ出いざる青葉のみは季

節を欺き得ず、げに夏の初め、この年の春はこの長雨にて永久とこしえに逝ゆきたり。宮本二郎は言うまでもなく、貴嬢きみもわれもこの悲しき、あさましき春の永久とこしえにゆきてまたかえり来たらぬを願うぞうたてき。

わが心は鉛のごとく重く、暮れゆく空の雲をながめ入りてしはしは夢心地せり。われには少しもこの夜の送別会に加わらん心あらず、深き事情こころも知らでただ壯さかんなる言葉放ち酒飲みかわして、宮本君がこの行こうを送ると叫ぶも何かせん。

げに春ちよう春は永久とこしえに逝ゆきぬ。宮本二郎は永久を契りし貴嬢きみ千葉富子みちよに負そむかれ、われは十年の友宮本二郎と海陸、幾久しく別れてまたいつあうべきやを知らず、かくてこの二人ふたりが楽しき春

は永久とこしえにゆきたり。わが心は鉛のごとく重く、暮れゆく空は墓のごとし。

この階下したの大時計六時を湿しめやかに打ち、泥を噛かむ轍わだちの音重々おもおもしく聞こえつ、車来たりぬ、起たつともなく起ち、外がい套とうを肩に掛けて階下したに下り、物をも言わで車上に身を投げたり。運び行かる先は五番町なる青年倶楽部クラブなり。

倶楽部の人々は二郎が南洋航行の真意を知らず、たれ一人ひとり知らず、ただ倶楽部員の中うちにてこれを知る者はわれ一人のみ、人々はみな二郎が産業と二郎が猛氣とを知るがゆえに、年若き夢想を波は濤とうに託してしばらく悠々ゆうゆうの月日をバナナ実る島に送ることぞぞと思えり、百トンの帆船は彼がための墓地たるを知らざるなり。知

らぬも理ことわりならずや、これを知る者、この世にわれとわが母上と二
 郎が叔母おぼとのみ。あらず、なお一人の乙女おとめ知れり、その美まなこしき眼
 はわが鈍き眼に映るよりもさらに深く二郎が氷こおれる胸に刻まれお
 れり。刻みつけしこの痕跡あとは深く、凍れる心は血に染みたり。た
 だかの美しき乙女よくこれを知るといえども、素知らぬ顔して弁い
 解いひらきの文ふみを二郎が友、われに送りぬ。げに偽りという鳥の巢いく
 うべき枝ほど怪しきはあらず、美うるわしき花咲きてその実つちくれは塊なり。
 二郎が家に立ち寄らばやと、靖国社やすくにしやの前にて車と別れ、庭に
 入りぬ。車を下おりし時は霧雨やみて珍しくも西の空少しく雲ほこ
 ろび蒼空あおぞらの一線ひとすじなお落日の余光をのこせり。この遠く幽かすかな
 る空色は夏のすでに近きを示すがごとく思われぬ。されど空気は

重くしめ湿り、茂り合ふ葉桜の陰を忍びにかよう風の音は秋に異なら
ず、木立ちこだの夕闇ゆうやみは頭うなだれて影のごとく歩む人の類たぐいを心ま
つさまなり。ああこのごろ、年若き男の嘆息ためいきつきてこの木立ち
を当てもなく行き来せしこと幾度たびぞ。

水みづ 瀦たまり

に映る雲の色は心失うせし人の顔の色のごとく、これに

映るわが顔は亡友なきともの棺ひつぎを枯れ野に送る人のごとし。目をあげて

心ともなく西の空をながむればかの遠き蒼空の一線は年若きわれ
らの心の秘密なぞの謎語のごとく、これを望みてわが心怪しゆう躍り
ぬ。ああ年少の夢よ、かの蒼空はこの夢の国ならずや、二郎も貴き
嬢みもこのわれもみなかの国の民なるべきか、何ぞその色の遠くし
て幽かすかに、恋うるがごとく慕うがごとくはたまどろむごとくさむ

るがごときや。げにこの天をまなざしうとく望みて永久とこしえの希望語らいし少女と若者とは幸いなりき。

池のかなたより二人の小娘、十四と九つばかりなるが手を組みうたて唄いつつ来たるにあいぬ。一目にて貧しき家の児こなるを知りたり。唄うはこのごろ流行はやる歌と覚しく歌の意こころはわれに解げし難し。ただ二人が唄う節ふしの巧みなる、その声は湿しめりて重き空氣にさびしき波紋をえがき、絶えてまた起こり、起こりてまた絶えつ、周圍あたりに人影見えず、二人はわれを見たれど意こころにとめざるごとく、一足歩みては唄い、かくて東屋あずまやの前に立ちぬ。姉妹はらから共に色蒼あおざめたれど楽しげなり。五月雨さみだれも夕暮れも暮れゆく春もこの二人にはとりわけて悲しからずとりわけてうれしからぬようなり、ただお

のが唄う声の調べのまにまにおのが魂たまを漂たわせつ、人の上も世の事も絶えて知らざるなり。人生まれて初めは母の唄いたもう調べに誘われて安けく眠り、その次は自ら歌いて自ら眠るこの姉妹のごときなり、人唄えばとて自ら歌えばとてついに安き眠りを結び得ざるは貴嬢きみのごとき二郎のごときまたわれのごとき年ごろの者なるべし、ただ二郎この度は万里たびばんりの波上、限りなき自然の調べに触れて、誠なき人の歌に傷つきし心を安めばやと思ひ立ちぬ。げに真情まごころ浅き少女おとめの当座の曲にその魂を浮かべし若者ほど哀れなるはあらし。

われしばしこの二人を見てありしに二人もまた今さらのように意こころづきしか歌を止め、わが顔を見上げて笑いぬ、姉あねなるは羞はずかしげ

に妹なるはあきれしさまにて。われまたほほえみてこれにこた応えざるを得ざりき。君はこのごろ毎夜狂犬いでて年若き娘をのみか噛むちよううわさをききたまいしやと、妹はなれなれしくわれに問えり、問いの不思議なると問えるさまの唐とうとつ突なるとにわれはあきてほほえ微笑みぬ。姉はわが顔を見て笑いつ、愚かなることを言うぞと妹の耳を強く引きたり。されど片目の十蔵がかく語りしものを痛きことかなと妹は眼をまなこみはり口とがらせ耳をおおいて叫びぬ。たちまち姉は優しく妹の耳に口寄せて何事かささやきしが、その手をとりにて引き立つれば妹はわれを見て笑えみつ、さて二人は唄うこともとのごとくにしてかなたに去りぬ。

げに見すばらしき後ろ影、蓬よもぎなす頭、色あせし衣、われはしば

しこれを見送りてたたずみぬ。この哀れなる姿をめぐりて漂う調べの身にしみし時、霧雨きりあめのなごり冷ややかに顔をかすめし時、一陣の風木立ちを過ぎて夕闇嘯うそがきし時、この切那せつなわれはこの姉妹はらかの行く末のいかに浅ましきやを鮮あざやかに見たる心地せり。たれかこの少女おとめらの行く末を守り導くもので、彼ら自ら唄いて自ら泣く時も遠くはあるまじ。

急ぎて裏門を出いでぬ、貴嬢きみはこの梅林を憶おぼえたもうや、今や貴嬢には苦しき紀念かたみなるべし、二郎には悲しき木陰となり、われには恐ろしき場処かどとなれり。門を出いずれば角かどなる茶屋の娘軒先かすに立ちてさびしげに暮れゆく空をながめいしが、われを見て微かすかに礼いやなしぬ、貴嬢きみはこの娘を憶いえいたもうや。賤いやしきこの娘を。

二郎はすでに家にあらざりき、叔母はわれを引き止めてまたもや数々かずかずの言葉もて貴嬢を恨み、この恨み永久とこしえにやまじと言いつちて泣きぬ、されどいずこにかなお貴嬢を愛めずる心ありて恨めど怒り得ぬさまの苦しげなる、見るに忍びざりき。叔母恨むといふとも貴嬢怒るに及ばじ、恨む心は女の心にして、恨む女は愛めずる女なり、ただこの叔母を哀れとおぼさずや。

叔母のいいけるは昨夜夜ふけて二郎一束の手紙に油を注ぎ火を放ちて庭に投げいだしけるに、火は雨中に燃えていよいよ赤く、しばしは庭のすみずみを照らししばらくして次第に消えゆくをかれは静かにながめてありしが火消えて後もややしばらくは真闇まくらなる庭の面おもをながめいたりとぞ。火や煙や灰や闇あんこく黒や、二郎はそ

の次に何者をか見たる。

わが車ごみざか五味坂を下れば茂み合う櫛かしの葉陰かげより光影ひかげきらめきぬ。

これ倶楽部クラブの窓より漏るるなり。雲の絶え間には遠き星一つ微かすか

にもれたり。受付の十蔵、卓ひじに臂ひじを置き煙草たばこ吹かしつつ外面そともをな

がめてありしがわが姿を見るやその片目をみはりて立ちぬ、その

鼻よりは煙ゆるやかに出いでたり。軽く礼いやして、わが渡す外がいとう套とうを

受け取り、太くしわがれし声にて、今宮本ぬしの演説ありと言ひ

ぬ。耳みみをそばだつるまでもなく堂どうをもるはかれの美うるわしき声、

沈ちようめる調てうなり。堂どうの闔たつを押さんとする時何心なく振り向けば十蔵

はわが外套を肩にかけ片手にランプを持ちて事務室の前に立ちこ

なたをながめいたり。この時われかの貧しき少女が狂犬のうわさ

せしといひし片目の十蔵を憶い起こしぬ。十蔵はわが振り向きしを見て急にランプの火を小さくせり。われその故を解し得ず、ただ見る六尺ばかりの大男の影おぼろなるが静かに事務室の中に消え去りしを。この十蔵が事は貴嬢も知りたもうまじ、かれの片目は奸なる妻が投げ付けし火箸の傷にて盲れ、間もなく妻は狂犬にかまれて亡せぬ。このころよりかれが挙動に怪しき節多くなり増さりぬ、元よりかれは世の常の人にはあらざりき。今は三十五歳といえど子もなく兄弟もなし。

予は闔を排して内に入りぬ。

三十余りの人々長方形の卓を囲みて居並びしがみな眼を二郎の方のみ注げば、わが入り来たれるに心づきしは少なかりき。一

座肅然たる中に二郎が声のみぞ響きたる。かれが蒼白あおしろき顔は電
 燈の光を受けていよいよ蒼白あおしろく貴嬢きみがかつて仰ぎ見て星とも愛めで
 し眼まなこよりは怪しき光を放てり。ただいずこともなく誇れる鷹たかの梯かかげ
 眉宇びうの間に動き、一搏いっぱくして南の空遠く飛ばんとするかれが離別
 の詞を人々は耳そばだてて聴きけど、暗き穴より飛び来たりし一矢
 深くかれが心を貫けるを知るものなし、まして暗き穴に潜める貴き
 嬢みが白き手をや、一座の光景ありさまわが目にはげに不思議なりき。
 二郎は病やまいを養うためにまた多少の経画けいかくあるがためにと述べた
 り、されどその経画なるものの委細は語らざりき。人々もまたこ
 れを怪しまざるようなり。かれが支店の南洋にあるを知れる友ら
 はかれ自らその所有の船に乗りて南洋おもむに赴くを怪しまぬも理ことわりなら

ずや。ただひたすらその決行を壮なりと思えるがごとし。

女の解し難きものの一をわが青年倶楽部の壁内ならでは醸さざ
る一種の瀨気なりといわまほし。今の時代の年若き男子一度この
裡に入りて胸を開かばかれはその時よりして自由と人情との友な
るべし。さてさらに貴嬢の解し難きものの一を言わんか、この瀨
気を呼吸するかの二郎なり。何ゆえぞと問いたまいそ、貴嬢もし
よくこれを解し得る少女ならんにはいかで暗き穴よりかの無残な
る箭を放たんや。二郎述べおわりて座につくや拍手勇ましく起こ
り、かれが周囲には早くも十余人のもの集まりたり。廊下に出ず
るものあり、煙草に火を点ずるものあり、また二人三人は思い思
いに椅子を集め太き声にて物語り笑い興ぜり。かかる間に卓上の

按^{あんばい}排^{はい}備^びわりて人々またその席につくや、童子^{ボーイ}が注^つぎめぐる^{ビール}麦^{ビール}酒^酒の泡^{あわ}いまだ消えざるを一^あ斉^{せい}に挙^あげて二^あ郎^{らう}が前途^{ぜんてい}を祝^{いわ}しぬ。儀式^{ぎしき}はこれにて終^おわり俱^く楽^{らく}部の血^ちはこれより沸^わかんとす。この時^{とき}いずこともなく遠^と雷^{らい}のとどろくごとき音^ねす、人々顔^{かほ}と顔^{かほ}見^み合^あわす隙^{ひま}もなく俄^が然^{ぜん}として家^{いえ}振^ふるい、童^{ボーイ}子^{ベヤ}部^べ屋^やの方^{かた}にて積^たみ重^{かさ}ねし皿^{さら}の類^{るい}の床^{とこ}に落^おちし響^{ひび}きすさまじく聞^きこえぬ。

地震^{ちきん}ぞと叫^{こゑ}ぶ声^{こゑ}室^{むろ}の一^{いち}隅^{ぐう}より起^おこるや江^え川^{がわ}と呼^よぶ少^{せう}年^{ねん}真^まつ先^{さき}に闖^{たつ}を排^{はい}して駆^かけいでぬ。壁^{かべ}の落^おつる音^ねものすぐ玉^{たま}突^つき場^ばの方^{かた}にて起^おこれり。ためらいいし人々一^{いち}斉^{せい}に駆^かけいでたり。室^{むろ}に残^{のこ}りしは二^に郎^{らう}とわれと岡^{おか}村^{むら}のみ、岡^{おか}村^{むら}はわが手^てを堅^かく握^{にぎ}りて立^たち二^に郎^{らう}は卓^{たか}のかなたに静^{しず}かに椅^い子^{すい}に倚^よれり。この時^{とき}十^{じゅう}蔵^{ざう}室^{むろ}の入^いり口^{ぐち}に立^た

ちて、君らは早く逃げたまわずやというその声、その挙動ふるまい、その顔色、自己みずからは少しも恐れぬようなり。この時振動の力さらに加わりてこの室の壁眼前に崩れ落つる勢いすさまじく岡村と余とは宮本宮本と呼び立てつつ戸外に駆けいでたり。十歳も続いて駆けいでしが独りひと二郎のみは室に残りぬ、われいかでためろうべき、二郎を連れ出さばやと再び内に入らんとするを岡村堅くわが手を握りて放たず、われら口々に宮本宮本と呼び立てぬ。この時十歳卒然独り内に入りたり。われらみな十歳二郎を救うことぞと思ひ、十歳早くせよと叫び、戸口をきつと見て二人の姿の飛び出いざるをまちぬ。瓦降かわらり壁落つ。われらみな檜かしの老木おいきを楯たてにしてその陰にうづくまりぬ。四辺あたりの家々より起こる叫び声、泣き声、遠おちかたに

響く騒然たる物音、げにまれなる強震なり。

待てど二郎十蔵ともに出で来たらず、口々に宮本宮本、十蔵早く出でよと叫べども答えすらなし、人々は顔と顔と見合して愕き怪しみ、わが手を握りし岡村の手は振るいぬ。

この時わが胸を衝きて起こりし恐ろしき想いはとても貴嬢の解したまわぬ境なり、またいかでわが筆よくこれを貴嬢に伝え得んや。試みに想い候え、十蔵とは奸なる妻のために片目を失いし十蔵なり、妻なく子なく兄弟なく言葉少なく気重く心怪しき十蔵なり。二郎とはすなわち貴嬢こそよく知りたもう二郎なり。あわれこの二人は始めよりその運命を等しゆうすべきところありて黙々のうちその消息を互いに会しいたるならざるか。柱鳴り瓦飛び

壁落つる危急の場にのぞみて二人一室に安座せんとは。われこれを思いし時、心の冷え渡るごとき恐ろしきある者を感じぬ、貴嬢はただこの二人ただ自殺を謀りしとのみのたもうか、げに二郎と十蔵とは自殺を謀りしなるべきか。あらず、いかで自殺なる二字をもつてこの二人の怪しき挙動の秘密を解き得べきぞ、貴嬢がいわゆる人とは自ら生きんことを計り自ら死なんことを謀る動物なるべし、この二つの一つを出でざる動物なるべし。

間もなく振動は全くやみぬ。われら急に内に入りて二人を求めしに、二郎は元の席にあり、十蔵はそのそばの椅子に座し、二郎が眼は鋭く光りて顔色は死人かと思わるるばかり蒼白く、十蔵は怪しげなる微笑を口元に帯びてわれらを迎えぬ。あまりの

事に人々出す言葉を知らざりき。倶楽部員は二郎の安全を祝して
みな散じゆき、事務室に居残りしは幹事後藤ごとうのみとなりぬ。十蔵
は受付の卓に倚りて煙草を吹かし、そのさまわがこの夜倶楽部に
来し時と変わらず見えたり、ただ口元なる怪しき微笑のみ消えざ
るぞあやしき。

余は二郎とともに倶楽部を出いでぬ。

一天晴れ渡りて黒澄みたる大空の星の数も算よまるるばかりなり
き。天上はかく静かなれど地上の騒いぎは未いまだやまず、五味坂なる
派出所の前は人山を築けり。余は家のこと母のこと心にかかれば、
二郎とは明朝を期して別れぬ。

家には事なかりき。しばし母上と二郎が幸さちなき事ども語り合ひ

しが母上、恋ほどはかなきものはあらしと顔そむけたもうをわれ、
あらず女ほど頼み難きはなしと真顔にて言いかえしぬ。こは世に
ありがちの押し問答なれどわれら母子おやこの間にてかかる類たぐいの事と言
葉にのぼりしは例なきことなりける。されど母上はなお貴嬢が情
けの変わりゆきし順序をわれに問いたまいたれど、われいかでこ
の深き秘密を語りつくし得ん、ただ浅き知恵、弱き意志、順なる
ようにてかえつて主我の念強きは女の性なるがごとしとのみ答え
ぬ。げにわれは思う、女もし恋の光をその顔に受けて微笑ほほえむ時は
花のごとく輝く天津乙女あまつおとめとも見ゆれど、かの恋の光をその背にし
て逃げ惑うさまは世にこれほど醜きものあらしと、貴嬢はいかが
思いたもうや。

母上との物語をおえて二階なるわが室しつにかえり、そのまま身を椅子に投げ、両手もてわが顔をおおいぬ。この時こころの疲れ、身の疲れを一時に覚えて底なき穴に落ちゆく心地こころちし、しばしは何事をも忘れてたり。夢ゆめうつつ 現の境を漂うて夜のふくるをも知らざりしが、ふと心づきて急に床に入りたれど今は心さえてたやすくは眠るあたわず、明けがた近くなりてしばしまどろみぬと思うや、目さめし時は東の窓に映る日影珍しく麗うらちかなり、階下したにては母上の声す、続いて聞こゆる声はまさしく二郎が叔母なり、朝とく来たりて何事の相談ぞと耳そばだつれど叔母の日ごろの快活まじなるに似にず今朝けさは母もろともしめやかに物語して笑い声さえ雑まじえざるは、いぶかしさに堪たえず、身を起こして衣着かえんとする時階段を上

り来る音してやがて頭さしいませしはわが妹なり、宮本の叔母様
来たりたまいぬ早く下りたまえと言ひ捨ててそのまま階下にゆけ
り。

朝の事をおわるや急ぎて母上の室を入れば、母上と叔母とは火
鉢ばちを中にして対したまい、叔母はわが顔を見て物をもたまい得
ず、ハンケチにて眼まなこふきふき一通の手紙を渡したまえり。これ二
郎が手紙なり。

文は短けれど読みおわりて繰り返す時わが手振るい涙たばしり
落ちぬ、今貴嬢きみにこの文ふみを写して送らん要あらず、ただ二郎は今
朝夜明けぬ先に品しながわ川なる船に乗り込みて直ちに出帆せりといわ
ば足りなん。この身にはもはや要なき品なれば君がもとに届けぬ、

君いかようにもなしたまえと書き添えて貴嬢きみの写真一枚はさみあり、こは貴嬢きみがこの正月五日御地より送りましたまいし物の由。さてわれにも要なき品なれば貴嬢きみに送り返すべきなれど思う節あればしばしわが手もとに秘め置く事といたしぬ。無益とは知りつつも、車を駆りて品川にゆき二郎が船をもとめたれど見当たらぬも理ことわりなり、問屋といやの者に聞けば第二号南洋丸は今朝四時に出帆せりとの事なれば。

ああ哀れなる二郎、われらまたいつ再びあうべきぞ。貴嬢きみはわれもはやこの一通にて厭あき足りぬと思いたもうや。あらず、あらず、時は必ず来たるべし——

大空隈くまなく晴れ都の空は煤煙ばいえんたなびき、沖には真帆片帆まほかたほ白く、

房総の陸地鮮やかに見ゆ、射す日影、そよぐ潮風、げに春ゆきて
 夏来たりぬ、樂しかるべき夏来たりぬ、ただわれらの春の永
 久に逝きしをいかにせん——

下

時は果たして来たりぬ、ただ貴嬢もわれも二郎もかかる時かか
 るところにて三人相あうべしとは想いもよらず。

時は果たして来たりぬ、一年と二月は仇に過ぎざりき、ただ
 貴嬢にはあまり早く来たり、われには遅く来たれり、貴嬢は永
 久に来たらざるを希い、われは一日も早かれとまちぬ、いずれ

にもせよ余がこの手紙したた認むべき時はついに来たり。

夏の玉たま章あき一通、年の暮れの玉章一通、確かに届きぬ。われこ

れに答えざりしは今の時のついに来たりて、われ進みて文ふみまいら

すべきことあるをかねて期ごしいたればにて深き故ゆえあるにあらず。

今こそ答えまいらすべし、ただ一言ごん。弁解の言葉連ねたもうな、

二郎とてもわれとても貴嬢きみが弁解の言葉ききて何の用にかせん。

二郎が深き悲しみは貴嬢きみがしきりに言い立てたもう理ことわり由のいか

んによらで、貴嬢が心にたたえたまいし愛の泉の涸かれし事実の故

のみ。この事實は人知れず天あめが下にて行なわれし巖いわかなる事実な

り。

いかなる言葉もてもこれを言い消すことあたわず、大空の星の

隕おちたるがごとし、二郎はその理ことわり由ゆのいかんを見ず、ただ光の失うせぬるを悲しむ。げにこの悲しみや深し。

友の交わりを続けてよとの御意ぎよ、承りぬ。これより後なお眞の友義というものわれらが中に絶えずば交わりは勉つとめずとも深かるべし、ただわが言うべきを言わしめたまえ、貴嬢のなすべきことは弁解つとを力つとむることにはあらで、諸手もろてを胸に加え厳かに省みたまうことなり、静かにおのが心を吟味したもう事なり、今われ実にかの人を愛するや否やと。おのれの心の変わりゆきし跡を見たまうてあきれたもうとも笑いたもうとも泣きたもうとも、そは貴嬢が自由なり、されどあきるも笑うも泣くもみな貴嬢が品ひとがら性にかたよりのことなれば、あながち貴嬢が自由ともいい難かたし。

さて時はついに来たりぬ、いざわが文に入らん。

午後四時五十五分発横浜行きの列車にわれら二人が駆け込みし時は車長のパイプすでに響きし後のちなることは貴嬢の知りたもうところのごとし。二郎まず入りてわれこれに続きぬ、貴嬢の姿わが目に入りし時はすでに遅かりき、われら乗るかうるひまもなく汽車は進行を始めたり。

貴嬢の目と二郎が目と空にあいし時のさまをわれいつまでか忘るべき、貴嬢は微かすかにアと呼びたもうや真蒼まさおになりたまいぬ、弾は力ね強き心の二郎はずかずかと進みて貴嬢が正面の座に身を投げたれど、まさしく貴嬢を見るあたわず両たなごころの掌もて顔をおおいたるを貴嬢が同っ伴者れの年若き君はいかに見たまいつらん。ただ静かに貴

嬢を顧みたまいて貴嬢きみの顔色の変われるに心づき、いかにしたま
いし心地こころ悪しくやおわすると甘ゆるように問いたまいたる、その
時もしわが顔にあざけりの色の浮かびたりせば恕ゆるしたまえ、二郎
が耳にはこの声いかに響きつらん、ただかれがその掌たなごころを静かに膝ひざ
の上に置きて貴嬢つれが伴の方をきつと見たる、その時のかれが眼まなこよ
り怪しき光の閃ひらめきしを貴嬢はよくも得見えたまわざりしと覚ゆ。

貴嬢きみがわずかに頭をあげて、いなとかの君の問いに答えたま
いたる、その声は墓のかなたより亡者や吹き込みし。

よき物まいらせんとてかの君手さげの内を探りたまいしが、こ
はいかに宝丹ほうたんを入れ置きぬと覚えしにと当惑のさまを、貴嬢は
見たまいて、いなさまでに候わずとしいて取り繕わんとなしたも

うがおかしく、その時もしわが顔に卑下いやしみの色の動きたりせば怨ゆるしたまえ。

われ二郎に向かいて、御身は宝丹持ちたもうならずやと問えば、二郎、打ち惑いたるさまにてわずかに、しかりと答う。かの君の肝きも太きことよ、直ちに二郎に向かつて、少し賜わずやと求めたもう。貴嬢がこの時の狼狽ろうばいのさまこそおかしけれ、君よさまでは候わず宝丹には及ばずと訴うるようにのたまひし声はしわがれて呼吸いきするも苦しげにおわしぬ。

二郎やむを得ず宝丹取りだして、われに渡しければわれ直ちに薬すくを掬すくいて貴嬢が前に差しいだしぬ、この時貴嬢きみまなこが眼まなこうるみてわが顔を打ち守りたまいたる、ああ刻むこき君かなとのたまひしように

われは覚えぬ。

たやすく貴嬢が掌たなごころいだしたまわぬを見てかの君、早く受けたまわらずと諭さとすように物言いたもうは貴嬢が親きみしき親族みうちの君にてもおわすかと二郎かの時は思ひしなるべし、ただわれ、宇都宮時雄の君とはこの人のことよと一目にて看破みりたれば、貴嬢きみに向かつてかかる物の言いざましたもうを少しも怪しまざりき。貴嬢きみが掌たなごころに宝丹移せし時、貴嬢きみは再びわが顔を打ち守りたまひぬ、うるみたる貴嬢の目の中には、むしろ一匙さじの毒薬たまえ刻むしき君とのたもう心鮮あややかに読まれぬ。二郎はかの方かたに顔を負けそむけ、何も知りたまわぬかの君は、ただ一口に飲みたまえと命ずるように言いたもう、そのさまは、何をかの君かく誇りたもうぞと問わまほしゅうわが

思いしほどなりき。貴嬢きまなこが眼まなこを閉じて掌てのひらを口に当て、わずかに仰
 ぎたまたまいし宝丹たまいはげに魂たまに沁しみ髓すいに透とおりて毒薬どくやくの力ちからよりも深く貴
 嬢の命いのちを刺さしつらん。されどかの君きみは大口おほくち開ひらきて笑わらいたまい、宝
 丹たまい飲のむがさまでつらきかのたまと宣のたまいつつわれらを見てまた大口おほくちに笑わら
 たもう。げに平へい壤じよう攻せ落せせし將軍しやうぐんもかくまでには傲おごりたる色いろを
 見みせざりし。

二郎じらうが苦笑くせういしてこの將軍しやうぐんの大たい笑しやうにこた応こたえ奉ほうりしさまぞおか
 しかりける。將軍しやうぐんの御おん齡としは三十さんじゅうを一つも越こえたもうか、二郎じらうに
 比ひぶれば四よつばかりの兄あに上じやうと見み奉ほうりぬ。神戸こうべなる某あつち商館しやうくわんの立たち者ものと
 はかねてひそかに聞きき込みこいたれど、かくまでにドル臭くさき方かたとは
 思おもわざりし。ドル臭くさしとは黄金こがねの力ちから何なに事ことをもなし得えるものぞと堅か

く信じ、みやびたる心は少しもなく、学者、宗教家、文学者、政治家の類をたぐい一笑し倒さんと意気込む人の息気いきをいう、ドルの文字はまたアメリカ帰りの紳士ちよう意をも含めり。詳しく説明は宇都宮時雄の君に請いたもうぞ手近なる。

いずこまで越したもうやとのわが問いは貴嬢きみを苦しめしだけまたかの君の笑壺えつぼに入りたるがごとし。かの君、大磯おおいそに一泊して明日は鎌倉かまくらまで引つ返しかしこにて両三日遊びたき願いに候えど——。われ、そは御楽おんしみの事なるべし、大磯鎌倉は始めてのお越しにや。かの君さりげなく、妹いもには始めての遊びになん。ああこの時、わが目と二郎の目とは電いなずまのごとく貴嬢が目を射たり、蒼あおざめし貴嬢が顔はたちまち火のごとく赤く変わり、いそぎハン

ケチもておおいたまいし後はしばしわれらの言葉も絶えつ。

貴嬢がにかかるけだか気高き兄君をもちたもうことはわれらまことに知らざりき、まして貴嬢が鎌倉の辺に遊びたもうは始めての由を聞き、われらあきれてしばしは物も得え言わず眼をみはりて貴嬢を打ち守りたる、こは理ことわりあることと貴嬢もうなずきたまわん、かくにわかには顔色を変えたもうは限りなき恥を感じたまいしこととわれらは見たり。貴嬢きみはよも鎌倉にて初めて宮本二郎にあいたまいたる、そのころの本末もとすえを忘れたまわざるべければ。

鎌倉ちよう二字は二郎が旧歡の夢を呼び起こしけん、夢みるごときまなざし遠く窓外の白雲はくうんをながめてありしが静かに眼を閉じて手を組み、膝ひざを重ねたり。

げに横浜までの五十分は貴嬢きみがためにも二郎がためにもこの上なき苦惱なりき、二郎には旧歡かなの哀しみ、貴嬢には現場の苦しみ、しかして二人等しく限りなきの恥に打たれたり。ただ貴嬢きみの恥は二郎に対する恥、二郎の恥は自己おのれに対する恥、これぞ男と女の相違ならぬ。

汽車横浜に着きてわれら立ちあがりし時、かの君も立ちあがりて厚く礼のべたもう、その時貴嬢きみもまたわずかに顔なるハンケチを外はずして口ごもりたもうや直ちにまた身を座に投げハンケチを顔に当てたまいぬ。その手のいたくふるえるさまわが目にも知れれば、かの君顧みたまいて始めて怪しと思う色まなこを眼の中に示したまえり。

乗る客、下りる客の雑踏の間をわれらおおまた大股に歩みて立ち去り、停車場より波止場まで、波止場より南洋丸まで二人ひとこと一言も交えざりき。

船のぼに上りしころは日ようやく暮れて東の空には月いで、わが影淡く甲板に落ちたり。卓あり、粗末なる椅子いす二個を備え、主と客とをまてり、玻璃製の水瓶びんとコップとは雪白なる被布カバの上に置かる。二郎は手早くコップに水を注つぎて一口に飲み干し、身を椅子に投ぐるや、貞二と叫びぬ。

声高く応いこしてここに駆け来る男は、色黒く骨たくましき若者なり、二郎は微笑ほほえみつ、早く早くと優しく促せり。若者はただいまと答え身を回めぐらしてかなたに去りぬ。二郎、空腹ならずや。われ、

物言うも苦し。二人は相見て笑いぬ、二郎が煙草シガーには火うつされたり。

今宵こよいは月の光を杯さかずきに酌くみて快く飲まん、思うことを語り尽くして声高く笑いたし、と二郎は心地こころよげに東の空を仰ぎぬ。われ、こしかた行く末を語らば二夜ふたよを重ぬとも尽きざらん、行く末は神知りたもう、ただ昨日きのうを今日きょうの物語となすべし、泣くも笑うもたれをはばからんや。

二郎、早く早く貞二、と叫びてまた快く笑い、こしかたは夢のみ、夢を語るに泣くは愚かなり。われ、ともかくも早く飲み早く食わずば泣くのほかあらず。

間もなく貞二が運ぶ酒肴しゅこう整いければ、われまず二郎がために

杯さかずきを挙げてその健康を祝し、二郎次にわがために杯を挙げかくて

二人ひとしく高く杯を月光にかざしてわが倶楽部クラブの万歳を祝しぬ。

二郎はげに泣かざるなり、貴嬢が上を語りいで、こし方かたの事に

及べど、かれはただ夢みるごときまなざしにて杯の底をながめ、

哀れなる少女よとかこつのみ。ああ時よ！。時の力は不思議なる

かな、一年余りの月日は二郎が燃ゆるごとき恋を変えて一片あわれの憐

みとなしぬ。かれが沸騰せし心の海、今は春の霞かすめる波平らかに

貴嬢はただ愛らしき、あわれなる少女おとめ富子の姿となりてこれに映

れるのみ。されどかれも年若き男なり、時にはわが語る言葉の端は

々しはしに喚びよさまされて旧歡の哀情かなしみに堪たえやらず、貴嬢がこの姿

をかき消すこともあれど、要するに哀れの少女おとめよとかこつ言葉は

地震の夜の二郎にはあらず、燃ゆる恋はいつしか静かなる憐みと
 変われり。されど貴嬢きみ、こはわが期ごしいたる変化なるのみ。

今日汽車の内なる彼女の苦惱くるしみは見るに忍びざりき、かく言い
 て二郎は眉まゆをひそめ、杯をわれにすすめぬ。泡立あわたつ杯は月の光に
 凝りて琥珀こはくの珠たまのようなり。二郎もわれもすでに耳熱し氣昂あがれり。
 月はさやかに照りて海も陸くがもおぼろにかすみ、ここかしこの舷げん
 燈とうは星にも似たり。

げに見るに忍びざりき、されど彼女自ら招く報酬むくいなるをいかに
 せん、わがこの言葉は二郎のよろこぶところにあらず。

二郎、君は報酬むくいと言うや、何の報酬ぞ。

われ、人の愛を盗みし報酬なり。

二郎はしばし黙して月を仰ぎつ、前なる杯さかずきを挙げ光にかざせば珠のごとき色かれが額に落ちぬ。しからば愛を盗まれし者の報酬むくいは何ぞと言いつつ飲み干せり。われ、哀かなしき心にその美酒うまざけの浸しみ渡る心地ならめ。二郎は歡然として笑いまた月を仰ぎぬ。

この時ほぼしら檣ほぼしらのあなたに立つ人あり、月を背にして立てばその顔は知り難し。突然あなたに向きて、しからば問いまいらせん、愛の盗人もし何の苦くるしみ悩なやみをも自ら覚えで浮世を歌い暮らさばいかに、これも何かの報酬あるべきか。

二郎は高く笑いてわが顔をながめ、わが答えをまつらんごとし。問いの主あるじはわれ聞き覚えある声とは知れど思いいです。檣ほぼしらの方に身を突きだして、御問おんいに答えまいらすはやすし、あなたに進

みてまず杯を受けたまえといえ、二郎は、来たれ来たれと手招きせり。

檣の陰より現われしは一個の大男なり。

見忘れたもうなと言いもおわらず卓の横に立つは片目の十蔵ならんとは。二郎は椅子を離れ手を拍つて笑いぬ。

いかで忘るべきと杯を十蔵の前に置き、飲み干してわれに与えよ再会を祝せん。

十蔵はわれを寿きて杯を飲み干しつ、片目一人、この船に加わりいることをかねて知りたまいしやと問う。われ、なんじの影地震の夜の間に消え失せぬと聞き、かの時の拳動など思い合わして大方は推しいたれどかく相見ては今さらのよううれし。

かつて酒量少なく言葉少なかりし十蔵は海と空との世界に呼吸
 する一年余りにてよく飲みよく語り高く笑い拳こぶしもて卓をたたき鼻
 歌うたいつつ足つまさき尖もて拍子取る漢子おとこと変わりぬ。かれが貴嬢を
 ば盗み去つてこの船に連れ来たらばやと叫びし時は二郎もわれも
 耳をふさぎぬ。かれの説によれば、貴嬢はもと心順なる少女おとめなれ
 ば境によりてその情を動かすがゆえに南洋丸に乗せて一年が間、
 浮世の風より救い出さば必ず御顔おんにふさわしき天津乙女となりた
 もうとの事なり、われはたやすくこれを信ずるあたわざるのみ。
 十蔵はその片目を細くして小歌うたいつ、たちまち卓を打ちて、
 君よかの問いの答えはいかにしたまいしとその片目をみはりぬ。
 二郎はいたく酔えい、椅子うしろの背に腕を掛けて夢ゆめ現の境にありし

が、急に頭をあげて、さなりさなりと言い、再び眼を閉じ頭を垂れたり。

もし君が言われるごとくば世には報酬なくして人の愛を盗みおせし男女はなはだ多しと、十歳はいきまきぬ。

われ、なんじの妻のごときをいえるにや。

あらず、あらず、彼女は犬にかまれて亡せぬ、恐ろしき報酬を得たりと答えて十歳は哄然と笑うその笑声は街多き陸のものにあらず。

二郎は頭あげて、しからばかのふびんなる少女もついに犬にかまるべきか。

犬や犬や浮世の街にさすろうもの犬ならざるいくばくぞ、かみ

つかまれつその日と夜を送り、そのほゆる声騒がしく、とてもわれらの住み得べきにあらず、船を家となし風と波とに命を託す、安ければ買い高ければ売り、酒あれば飲み、大声あげて歌うもわがために耳傾くるは大空の星のみ——月さゆる夜は風清し、はてなき海に帆を揚げて——ああ君はこの歌を知りたもうや——月さゆる夜は風清し——右を見るも左を見るも島影一つ見えぬ大海おおうな原ばらに帆を揚げ風斜めに吹けば船軽く傾き月さえにさえて波は黄金を砕く、この時舷ふなばたに立ちてこの歌をうたうわが情こころを君知りたもうや、げに陸りくを卑ひしみ海を懼おそれぬものならではいかでこのころを知らんや、ああされど君は知りたもう——

十歳はその杯さかずきを干してわが前に置き、——されど君は知りたも

うと繰り返せり。

この時二郎は静かに頭をあげて月を仰ぎしが急に身を起こしてかなたこなたと歩みつつ、ああ心地よき夜やと言ひ、皿よりパイナップルの太き一片を取りて口に入れつ、われを顧みて、なんじその杯を干してわれに与えずや。かれはわが杯を受けて心地よげに飲み干し、大空を仰ぎて、愛盗まれし者の受くべき報酬むくいはげに幸いなりき、十蔵なんじもその一人ならずやと杯を十蔵が前に置きぬ。十蔵は半ば眠りて応こたえなし。片目を微かすかに開きしもまた閉じたり。

夜はいよいよふけ月はますますさえ、市街の物音もやや静まりぬ。二郎は欄に倚よりわれは帆綱に腰かけしまま深き思いに沈みし

ばしは言葉なかりき。なんじはまことに幸いなる報酬むくいを得たりと思ふや二郎、とわれは二郎の顔を仰ぎて問いぬ。

二郎は目を細くして月を仰ぎつ、うれしき報酬とは思わず、されどかの少女をふびんなりと想えば限りなき哀れを覚え、われに負そむきし挙動など忘れはて、ただ懐なつかしさに堪たえず、げにふびんなるはかの少女なり。

二郎しからばなんじにまいらすべき一品しなありと、かねて用意せる貴嬢きみが写真のポケットより取り出して二郎が手に渡しぬ。何心なく受け取りてかれはしばし言葉なくながめ入りぬ、月の光は冷ややかに貴嬢きみが姿を照らせり。

そはなんじが叔母に託して昨年の夏の初め、品川出帆の朝、わ

がもとに送りたる品なり、今再びこれをなんじに還かえさん、なんじはなお手もとに置き難しと言うや、かく言いしわが言葉は短けれどその意こころは長し。

二郎はなお言葉なくながめ入りぬ。

げにかたじけなしと軽く戴いたき内うち衣かくし兜に入れて目を閉じたり。

二郎がこの言葉はきわめて短くこの挙ふる動まいははなはだ単純なれど、その深こころき意こころはたやすく貴き嬢みの知り得えざるところなり。

なんじはげにわが友なりと二郎はわが手を堅く握りて言えり、その声はふるいぬ。われこの時二郎に向かつて、よししからばわが言うをきけ、人は到底陸の動物なり、かつなんじはわれらと共になすべき業わざを有すと云い放つを願わざりしにはあらねど、され

ど二郎ほどの男、わが言葉によりて感憤するほどの不覺をなさじ、かれ必ずかれの志あり、海を懼れず陸を懼れずなさんと欲するところをなすはこの若者なるをわれ知れば、ただしばしそのなすところに任さんのみと思いてやみぬ。

二郎はわれを導きてその船室ケビンに至り、貴嬢きみの写真取り出して写真掛けるわが写真の下にはさみ、われを顧みてほほえみつ、彼か女れまたわれらの中に帰り来たりぬといえり。この言葉は短けれどその意こころは長し——

この書状は例によりてかの人に託すべけれど、貴嬢きみが手に届くは必ず数日の後なるべし、貴嬢きみもしかの君に示さんとならば、そは貴嬢きみの自由なり、われには何の関かかわりもなし。

(明治三十年十一月作)

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「国民之友」

1897（明治30）年11月

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2012年7月1日作成

2012年9月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おとずれ

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>